

報告と記録

連続講座「ベートーヴェン演奏を考える」/

シンポジウムとコンサート「ベートーヴェン最後の恋 “不滅の恋人”の意味を探る」

連続講座『ベートーヴェン演奏を考える』

報告者 藤本一子

連続講座プログラム

第1回「野平一郎が語るベートーヴェン演奏」6月12日(火)16:30 - (講堂小ホール)

講師：野平一郎 / 礪山 雅

第2回「ベートーヴェン演奏の歴史」7月3日(火)16:30 - (6 - 110スタジオ)

講師：平野 昭

第4回「ゲルルドのベートーヴェン解釈」9月27日(木)16:30 - (6 - 110スタジオ)

講師：礪山 雅 / 今井 顕 / ゲスト講師：宮澤淳一

第3回「エディションとメトロノーム」10月23日(火)16:30 - (1 - 507教室)

講師：藤本一子

第5回「ピアノ演奏のヒント」11月6日(火)16:30 - (6 - 110スタジオ)

講師：今井 顕

第7回「ピアノ音楽の分析とその演奏法」12月4日(火)16:30 - (6 - 110スタジオ)

講師：野平一郎

第6回「ベートーヴェンの思想と音楽観」1月22日(火)16:30 - (- 507教室)

講師：礪山 雅

発表会「交歓コンサート」2月15日(金)15:00 - (講堂小ホール)

全講師参加

(日程の変更により回の順序がいかかわっています。)

2001年度は、これまでになかった試みとして、連続講座「ベートーヴェン演奏を考える」が企画された。受講生を募り、演奏家と研究者による講師陣とともにベートーヴェン演奏の問題を考えようというもの。企画概要は次のとおりである。「ベートーヴェンを演奏しようとする人に、具体的な指標を与えることを目的とする。講師は当研究所所長および所員。受講生は、講座のディスカッションに参加し、自分の

テーマを発展させ、最後に成果を発表する。講座の受講生が直面している問題を講師と一緒に考え、主な教材として《ヴァルトシュタインソナタ》《ピアノソナタ第 30 番》をとりあげる。分野・所属は問わないが、演奏に関心のある人を優先する。」(「講座生募集案内」より抜粋)

2001 年 6 月から 2002 年 1 月まで 7 回の公開講座と、最後に連続講座の一環として、受講生による演奏発表会「交歓コンサート」が設定された。

講座は、一線のピアニストによるベートーヴェン演奏に対する発言と演奏に始まり、演奏史からみたベートーヴェン演奏のあり方、楽譜資料に関する基礎情報の提供、実践的教育的見地からの演奏のためのヒント、作品の構造分析と演奏法の連関、ベートーヴェンの音楽思想と形式問題など、全体を通して多角的でそれぞれに意味深い視点が提示された。予定された講師と講座プログラムがすべて実現したこと、受講生が当初の予定数 25 名をこえて 100 名に及んだこと、回を追うごとに各講座内容に緊密な連関が生じ、演奏実践と研究が一体となって受講生に具体的な指標が与えられたことなど、特筆すべきことは多い。“連続”講座の目的は十分に達成されたであろう。大学諸機関のご協力を感謝申し上げます。

以下に、各講座についての簡略な報告を記しておきたい。全 7 回の講座のうち、4 講座については担当の講師による論考が本年報に掲載されるので、参照いただきたい。

第 1 回「野平一郎ベートーヴェンを語る」は、作曲家・ピアニストとしてベートーヴェン作品に取り組み、演奏会と録音にめざましい活動を行っている野平一郎氏(客員所員)の発言と演奏を聴こうというものである。まず磯山所長のインタビューに答えるかたちで野平氏がベートーヴェン作品に対する意識や演奏法について語り、後半は《バガテル》Wo052、Op33、ついで《ヴァルトシュタインソナタ》全曲の演奏が行われた。音楽構造の確かな理解に基づく明晰な演奏は、ベートーヴェンに対して新鮮な感動を呼び起こし、とりわけ《バガテル》の演奏は、これらの作品に親しんでいなかった多くの聴き手に対して新しい耳を開かせたように思われた。これをうけた第 2 回「ベートーヴェン演奏の歴史」は、平野昭講師による。ピアノソナタ《ヴァルトシュタイン》の演奏を名ピアニストたちの録音で聴き比べ、「演奏とは何か」を考えようというもの。テンポの違いを基点にしながら、演奏における「オーセンティシティ」とは何か、を問いなおすこととなった。ここでの「テンポ」についての議論は、エディション問題へと展望をひらいた。そこから浮上する「テンポ」と楽譜の問題をとりあげたのが、第 3 回「エディションとメトロノーム」である。藤本一子講師によって、ベートーヴェン自身のメトロノーム記号に対する意識や同時代のエディション上の記載などについて、基礎的な文献からの情報と問いが提供された。第 4 回「グールドのベートーヴェン」は、特異なピアニストとして知られるグレン・グールドに焦点を当てた講座。グールド研究の第一人者宮澤淳一氏を講師に迎えてのユニークな企画である。この天才的な演奏家による《ピアノソナタ第 30 番》の演奏は、しかしながら決して特異ではなく、過去の

名ピアニストたちと聴き比べても、きわだって説得力のある、ある意味でオーセンティックな解釈を示していることは興味深かった。角度を変えて、第5回講座「ベートーヴェン演奏へのヒント」は、教育的実践の見地から設定された。学習者が楽譜に向かう際の疑問に対して、ピアニストであり教育者でもある今井顕講師が示唆と指針を与える講座である。氏の長年にわたるウィーンでの研鑽と教育経験にてらしてのアドバイスは説得力にとむもので、この講座によってエディションへの興味が導かれた受講生は少なくない。第7回「ベートーヴェンのピアノソナタの分析と演奏法」は、《ピアノソナタ第53番》を、野平一郎氏が実際に弾きながら分析し、解釈を語るもの。作曲家・ピアニストの真骨頂を示す刺激的な講座であり、講座終了後には、もうひとつの教材作品《ピアノソナタ第30番》を待望する声が多く寄せられた。第6回「ベートーヴェンの思想と音楽観」は磯山雅所長による。ベートーヴェンの革新的な形式思想を、「響き」の上で探求しようというプログラムである。ソナタ形式において最もベートーヴェンの特徴を示す一つとされる再現部について、従来行われたことのなかった「ダイナミック」に視点を定め、考察が行われた。音楽形式とは何かを考える上で、音楽学の方法論としても、斬新で意味深い講座であった。

「交歓コンサート」は、講座を通して学んだ成果を演奏という形で発表してもらおうという企画である。学外者をまじえた受講生10組が参加を希望。うち9組が事前の勉強会で今井所員からアドバイスをうけ、当日にのぞんだ。発表会は、室内楽2曲および独奏8曲のベートーヴェン作品。全プログラムが4ブロックにわけられ、間に今井所員による受講生へのインタビューが挟まれて、緊張のうちにもなごやかな会となった。ベートーヴェンを学ぼうという受講生の意欲ととりわけ1年生と2年生の意欲が注目をひく一方で、学外参加者による演奏も深い印象を残した。演奏会のあと、講堂リハーサル室において懇親を兼ねた反省会が行われた。講師をまじえて約40名が参加。熱のこもった意見交歓が行われ、9ヶ月にわたった連続講座を終了した。

連続講座マガジン

最後に、連続講座と連動するかたちで発刊された「連続講座マガジン」についても報告しておきたい。

これは、毎回の講座の趣旨を受講生に予告することを主目的とした印刷刊行物であるが、同時に、研究員による執筆の訓練の場としての意味も含まれていた。全7号が刊行され、質の高い内容をやさしく伝えることを旨としたそのプログラムは、読者の好評をえたと思われる。各号の項目は、「私のベートーヴェン」(講師)、講座報告(研究員)、文献紹介(講師および研究員)、次回講座説明(担当講師)などのほかに、ベートーヴェンの音楽を理解するための基本的なミニ知識情報(研究員)が盛り込まれた。例をあげれば「ベートーヴェンの手紙」「ベートーヴェンの日記」「ベートーヴェンの作品献呈」「ピア

ノの弦」「楽譜の透かし」「発想記号の歴史」ほかである。文献紹介では「アドルノの『ベートーヴェン』」といった難解とされる書物も、外部執筆者の協力をえてやさしく紹介された。

各号は各ページ A4 サイズの見開き裏表の体裁をとったが、差込みページによって拡大をはかった号もある。しかしながら、こうしたマガジン刊行の反面で、毎回の講座にあわせての編集作業は時間的な制約も大きく、研究所スタッフによる作業として適切であったかとの検討課題も残した。

なお「連続講座マガジン」は、印刷物としての刊行ののち、画像を割愛した体裁によって「メールマガジン」としてホームページ上で配信されている。

以下、マガジン各号の目次をあげておきたい。

創刊号・平成 13 年 6 月 25 日発行：「私のベートーヴェン」(礒山雅)、ひとこと「連続講座の意義」(今井顕)、第 1 回講座の報告(松村洋一郎)、知っ得くコーナー「3 種類の作品番号 作品目録のお話」(福本康之)、こんな本が出ています「青木やよひ著・ベートーヴェン 不滅の恋人 の謎を解く」(藤本一子)、第 2 回講座のお知らせ(平野昭)

第 2 号・平成 13 年 7 月 25 日発行：「私のベートーヴェン」(今井顕) ひとこと「グールド・シンポジウムに向けて」(宮澤淳一) 第 2 回講座の報告(福本康之) 知っ得くコーナー「メトロノームについて」(松村洋一郎) こんな本が出ています「児島新著・ベートーヴェン研究」(藤本一子) 第 3 回講座のお知らせ(藤本一子)「ベートーヴェンの伝記を読もう」(平野昭)

第 3 号(夏休み特集)・平成 13 年 8 月 15 日発行：「私のベートーヴェン」(青木やよひ)「夏の活動」(野平一郎)「保養地で聴きたいベートーヴェンの CD」(福本康之) 知っ得くコーナー「楽譜の透かし」(長谷川由美子) こんな本が出ています「中央ヨーロッパのベートーヴェン」(藤本一子)「ベートーヴェンの手紙」(松村洋一郎)「夏のベートーヴェン—郊外の保養」(藤本一子) 9 月附属図書館展示の案内「そして、ベートーヴェンは楽聖となった—洋楽導入に見るベートーヴェン像」(福本康之)

第 4 号・平成 13 年 9 月 21 日発行：「私のベートーヴェン」(宮澤淳一) ひとこと「ボンの生家記念館で」(平野昭)「ベートーヴェンの作品献呈」(松村洋一郎) 知っ得くコーナー「ピアノの弦」(福本康之) こんな本が出ています「J.カイザー著・ベートーヴェン 32 のソナタと演奏家たち」(藤本一子) 第 4 回講座のお知らせ(礒山雅)

第 5・第 6 合併号・平成 13 年 10 月 31 日発行：私のベートーヴェン(平野昭) ひとこと「ベートーヴェンの歌曲」(山下浩司) 第 3 回および第 4 回講座の報告(松村洋一郎) 知っ得くコーナー「発想記号の歴史」こんな本が出ています「クライヴ著・ベートーヴェンとその世界 伝記事典」(藤本一子) 第 5 回講座のお知らせ(今井顕)

第 7 号・平成 14 年 1 月 15 日発行：「私のベートーヴェン—転換の時代に」(野平一郎) 第 5 回講座の報告(福本康之) 知っ得くコーナー「ベートーヴェンの日記帳」(松村洋一郎) こんな論文が出て

います「フィッシャー著・ベートーヴェンのピアノソナタにおけるスタッカート」(藤本一子) 文献紹介「アドルノの『ベートーヴェン』」(東口豊・国立音楽大学講師)

次に「連続講座関連」関連資料を掲載しておく。

- ・連続講座「交歓コンサート」プログラム
- ・講座の配布資料から「附属図書館所蔵ピアノソナタのエディション一覧」/「ベートーヴェンが使用していた楽器」/講座「ゲルートのベートーヴェン解釈」関連資料
- ・連続講座マガジン第7号から「私のベートーヴェン―転換の時代に」/「アドルノのベートーヴェン」

ベートーヴェン作品による交歓コンサート

2002年2月15日(金) 15:00~17:30

講堂小ホール

プログラム

第1部 ピアノとチェロのためのソナタ 第3番 Op.69 第1楽章

勝村 まゆ (Vc. 東京音大卒)

大杉 光恵 (Pf. 日本大学芸術学部卒)

ピアノソナタ 第26番 Op.81a (《告別》) 第3楽章

新田 英美子 (本学ピアノ教育1年)

ピアノソナタ 第23番 Op.57 (《熱情》) 第1楽章

高橋 絵里 (本学ピアノ科2年)

自作主題による 32の変奏曲 WoO 80

大石 舞 (本学ピアノ科1年)

ピアノソナタ 第21番 Op.53 《ヴァルトシュタイン》 第1楽章

谷塚 裕美 (本学ピアノ科1年)

第2部

ピアノソナタ 第31番 Op.110 第1楽章

山崎 華子 (本学ピアノ科4年)

ピアノソナタ 第28番 Op.101 第1・3楽章

清水 新 (本学ピアノ科1年)

ピアノソナタ 第30番 Op.109 第1・2楽章

渡邉さらさ (本学大学院修了)

ピアノソナタ 第30番 Op.109 第3楽章

田島加奈子 (桐朋学園大学3年)

ピアノとヴァイオリンのためのソナタ 第5番 Op.24 (《春》) 第1楽章

藤本 彩 (Vn. 桐朋学園大学卒)

松浦みずほ (Pf. 桐朋学園大学卒)

国立音楽大学附属図書館所蔵のベートーヴェン、ピアノ・ソナタ全集楽譜一覧（一部選集も含む 2001.10.23 現在）

No.	校訂者	出版社	図書館請求記号	備考
1	Alnaes, Eyvind	W. Hansen	G2-601/(1)、G13-591/(2)	
2	Arrau, Claudio	Peters	G16-339/(1)、G17-463/(2)	「Urtext」
3	Bulow, Hans von/Lebert, Sigmund	G. Schirmer	G2-600	第1巻のみ所蔵（全2巻）
4	Bulow, Hans von/Lebert, Sigmund	G. Schirmer	G13-590	第1巻のみ所蔵（全2巻）
5	Buonamici, Giuseppe	Augener	G2-613	第1巻のみ所蔵（全2巻）
6	Casella, Alfredo	G. Ricordi	G2-610/(1)、G2-593/(2)、G2-621/(3)	
7	Casella, Alfredo	G. Ricordi	G2-607/(1)、G2-594/(2)	
8	Craxton, Harold	Associated Board of the Royal Schools of Music	G2-829/(1)、G2-831/(2)、G2-830/(3)	
9	D'Albert, Eugen	C. Fischer	G22-095/(1)、G22-096/(2)、G22-097/(3)、G22-098/(4)	
10	Damm, Gustav	Steingraber	G18-556/(2)	第2巻のみ所蔵（全5巻）
11	Dukas, Paul	A. Durand	G15-863/(1)、G15-864/(2)	
12	Germer, Heinrich	H. Litolff	G23-617/(2)	第2巻のみ所蔵（全3巻）
13	Hauschild, Peter	Schott/Universal Edition	G26-790/(1)、G27-682/(2)	「Wiener Urtext Edition」1、2巻のみ所蔵（全3巻）
14	Kohler, Louis/Ruthardt, Adolf	Peters	G16-337/(1)、G16-338/(2)	
15	Krebs, Carl	Kalmus	G2-591/(1A)、G2-603/(1B)	「Urtext」1、2巻のみ所蔵（全3巻）
16	Lamond, Frederic	Breitkopf & Hartel	G2-608/(1)、G13-948/(2)	
17	Martienssen, Carl Adolf	Peters	G13-947	第1巻のみ所蔵（全2巻）
18	Martienssen, Carl Adolf	Peters	G19-973/(1)、G19-974/(2)	「Urtext」
19	Pauer, Max	Peters	G2-623/(1)、G2-597/(2)、G2-611/(3)	
20	Schenker, Heinrich/Ratz, Erwin	Universal Edition	G2-606/(1)、G2-604/(2)、G13-581/(3)、G15-114/(4)	「Urtext」
21	Schenker, Heinrich/Ratz, Erwin	Universal Edition	G26-504/(1)、G26-505/(2)	「Urtext」
22	Schmidt, Hans/Schmidt-Gorg, Joseph	Henle	A0-283、A0-285	1、2巻のみ所蔵（第3巻未刊） 「新全集」より
23	Schnabel, Artur	Curci	G2-605/(1)、G13-513/(2)、G2-602/(3)	
24	Schnabel, Artur	Musyka	G2-843/(1)、G2-841/(2)	
25	Solyos, Peter	Zenemukiado	G15-214/(1)、G15-215/(2)、G15-216/(3)	
26	Wallner, B. A.	Henle	G2-595/(1)、G13-974/(2)	「Urtext」
27	Weiner, Leo	Zenemukiado	G13-816/(1)、G28-671/(2)、G13-817/(3)	
28	井口基成	春秋社	G19-086/(1)、G19-087/(2)、G19-088/(3)	「ピアノ作品集」より
29	児島新	春秋社	G19-868/(1)、G19-869/(2)	「Kritische Ausgabe」
30	児島新	春秋社	G27-217/(1)、G27-218/(2)	「Kritische Ausgabe」
31	園田高弘	春秋社	G28-454、G28-455、G28-456、G28-457	
32	田村宏	全音楽譜出版社	G2-614/(1)、G2-615/(2)	
33	ハロルド・クラクストン編、山根銀二訳	全音楽譜出版社	G15-307/(1)、G21-348/(2)、G21-349/(3)	
34	フランツ・リスト編、市田儀一郎訳	全音楽譜出版社	G25-870/(1)、G26-037/(2)	
35	ペーター・ハウシルト	音楽之友社	G26-967/(1)、G27-765/(2)	「ウィーン原典版」
36	諸井三郎解説	全音楽譜出版社	G16-025/(1)、G16-026/(2)	
37	記載なし	E. F. Kalmus	E1-307/(1)、E1-314/(2)、E1-318/(3)	E1-320/(4)Kalmus study scores no.750-754
38	記載なし	Lea Pocket Scores	E1-308/(1)、E1-312/(2)、E1-316/(3)	「Urtext」
39	記載なし	E. F. Kalmus	G2-622/(1)、G13-592/(2)	「Urtext」
40	記載なし	日本グラモフォン	G2-618/(1)、G2-616/(2)	
41	記載なし	E. F. Kalmus	A0-242、A0-244、A0-246	「旧全集」より
以下は、図書館に所蔵していないもので、当研究所が所蔵しているもの				
42	Bulow, Hans von/ Lebert, Sigmund	G. Schirmer		第2巻のみ所蔵（全2巻）
43	Diemer, Louis	H. Lemoine		「Urtext」第1巻のみ所蔵（全2巻）
44	Geoffroy, Dominique	H. Lemoine		（資料作成：研究員 松村洋一郎）
再版などによる重複を含む				

ベートーヴェンが使用していた鍵盤楽器

楽器と関連作品

年代	その頃使用した主な楽器	変音装置	その頃のピアノ・ソナタ	ピアノ変奏曲	ピアノ協奏曲
:1770-92、 1792-95	クラヴィコード		WoO47、50、51、作品2	WoO63、64、65、 66、68、69、70、72	WoO4、作品19 (第1-3稿)、作品 15(第1稿)
	チェンバロ	ダンパー			
	シュタインのピアノ	ダンパー(膝)			
	角型(スクウェア)ピアノ	弱音、ダンパー(手)、時に抑 音ペダル			
	シャンツのピアノ	弱音、ダンパー(膝)、時にフ ァゴット			
:1796-99	シュトライヒャー初期のピアノ ヴァルターのピアノ	弱音、ダンパー(手)	作品7、10、13、14、49	WoO71、73、75、 76	作品19(最終稿)
:1800-03	ヴァルターのピアノ	弱音、ダンパー(膝)、シフト 移動(手動)	作品22、26、27、28、31	WoO77、作品34、 35、WoO78、79	作品15(最終 稿)、作品37
	ヤケシュのピアノ	弱音、ダンパー(膝)、シフト 移動(手動)			
	エラールのピアノ	リュート、ダンパー、弱音、シ フト移動(足)			
:1804-06	エラールのピアノ	リュート、ダンパー、弱音、シ フト移動(足)	作品53、54、57	WoO80	作品58
:1807-09	エラールのピアノ	リュート、ダンパー、弱音、シ フト移動(足)	作品78、79、81a	作品76	作品61(ピアノ 版)、作品73
	シュトライヒャーのピアノ	弱音、ダンパー、シフト移動、 ファゴット(足)			
:1810-13	シュトライヒャーの可能性	弱音、ダンパー、シフト移動、 ファゴット(足)			
:1814-18	おもにシャンツのピアノ	弱音、ダンパー、シフト移動、 リュート、ドラムとベルk、ファゴ ット(足)	作品90、101、106		
	ブロードウッドのピアノ	2部分のダンパー、シフト移 動(足)			
:1819-22	ブロードウッドのピアノ	2部分のダンパー、シフト移 動(足)	作品109、110、111	作品120	
:1823-27	グラーフのピアノ	弱音、ダンパー、シフト移動 (足)		作品120	

付記：本学楽器資料館で試奏できる古い楽器

楽器学資料館で次の鍵盤楽器を試奏できます。

各楽器にあわせて小曲が用意されています

7/4	キャビネットピアノ Broadwood 1843年
7/11	グランドピアノ Broadwood c.1850
7/18	ヴァージナル Ammer 1971
9/5	リードオルガン Fils
9/12	グランドピアノ Erard c.1850
9/19	スクウェアピアノ Wornum c.1845
9/26	アップライトピアノ Pleyel c.1871
10/3	ハーブシコード Grimaldi 1697年(複製)
10/10	スクウェアピアノ Broadwood 1792年
10/17	グランドピアノ Erard c.1850
10/24	アップライトピアノ Pape c.1841
11/7	ハーブシコード Ruckers 1639年(複製)
11/14	グランドピアノ Streicher 1855年
11/21	クラヴィコード H.A. Hass 1763年(複製)
11/28	アップライトピアノ Moutrie
12/5	グランドピアノ Broadwood c.1900
12/12	スクウェアピアノ Broadwood 1830-1835年
12/19	ヴァージナル Ammer 1971

グレン・グールドのベートーヴェン解釈(参考資料)

1. グールドのベートーヴェン演奏記録

左端の数字は演奏会で取り上げた回数,

は正規スタジオ録音のあるもの, は正規スタジオ録音のないもの, ×は録音が残っていないもの

は放送録音・録画やライブ音源で死後発売されたもので(非正規盤を含む), 断わりのない限りトントでの収録

- 6 ピアノ協奏曲第1番八長調 op.15 (ゴルシュマン指揮コロンビア響; 58年録音・発売)
 マクミラン指揮トント響(51年ライブ放送)
 シャーマン指揮CBC響(第1楽章のみ; 54年ライブ放映)
- 18 ピアノ協奏曲第2番変ロ長調 op.19 (バーンスタイン指揮コロンビア響; 57年録音・発売)
 マクミラン指揮トント響(51年ライブ放送)
 スローヴァク指揮レニングラード・フィル(57年レニングラード・ライブ)
 G・ヨッフム指揮スウェーデン放送交響楽団(57年ライブ放送)
- 17 ピアノ協奏曲第3番ハ短調 op.37 (バーンスタイン指揮コロンビア響; 59年録音・60年発売)
 ウンガー指揮CBC響(55年ライブ放送)
 カラヤン指揮ベルリン・フィル(57年ベルリン・ライブ)
- 23 ピアノ協奏曲第4番ト長調 op.58 (バーンスタイン指揮コロンビア響; 61年録音・発売)
- 13 ピアノ協奏曲第5番変ホ長調 op.75 「皇帝」(ストコフスキー指揮アメリカ響; 66年録音・発売)
 アンチェル指揮トント響(70年放映)
- 1 ×三重協奏曲八長調 op.56 (× 61年に公演1回のみ)
- ソナタ第1番ハ短調 op.2, no.1 (74年録音・80年発売)
- ソナタ第2番イ長調 op.2, no.2 (76年録音・80年発売)
- 1 ソナタ第3番ハ長調 op.2, no.3 (76年録音・80年発売)
- 0 ソナタ第4番変ホ長調 op.7 (-)
 52年放送(ラルゴのみ)
- ソナタ第5番ハ短調 op.10, no.1 (64年録音・65年発売)
- 1 ソナタ第6番ハ長調 op.10, no.2 (64年録音・65年発売)
- 1 ソナタ第7番二長調 op.10, no.3 (64年録音・65年発売)
- ソナタ第8番ハ短調 op.13 「悲愴」(66年録音・67年発売)
- ソナタ第9番ホ長調 op.14, no.1 (66年録音・67年発売)
- ソナタ第10番ト長調 op.14, no.2 (66年録音・67年発売)
- ソナタ第11番変ロ長調 op.22 (第2・4楽章のみ 79/80年録音・未発売)
- ソナタ第12番変イ長調 op.26 「葬送」(79年録音・83年発売)
- ソナタ第13番変ホ長調 op.27, no.1 (81年録音・83年発売)
- ソナタ第14番嬰ハ短調 op.27, no.2 「月光」(67年録音・70年発売)
- ソナタ第15番二長調 op.28 「田園」(79年録音・80年発売)
- ソナタ第16番ト長調 op.31, no.1 (71年録音・73年発売)
- 8 ソナタ第17番二短調 op.31, no.2 「テンペスト」(60/67/71年録音・73年発売)
 60年放映
 69年放映
- 1 ソナタ第18番変ホ長調 op.31, no.3 (67年録音・73年発売)
- ソナタ第19番ト短調 op.49, no.1 (-)
 52年放送

- xソナタ第20 番ト長調 op.49,no.2 (-)
- xソナタ第21 番ハ長調 op.53「ワルトシュタイン」(-)
- xソナタ第22 番ヘ長調 op.54 (-)
- ソナタ第23 番ヘ短調 op.57「熱情」(67年録音・70年発売)
- ソナタ第24 番嬰ヘ長調 op.78「テレゼ」(68年録音・死後発売)
- xソナタ第25 番ト長調 op.79
- 2 xソナタ第26 番変ホ長調 op.81a「告別」
- xソナタ第27 番ホ短調 op.90 (-)
- 1 ソナタ第28 番イ長調 op.101
52年放送
- ソナタ第29 番変ロ長調 op.106「ハンマークラヴィーア」
70年放送
- 25 ソナタ第30 番ホ長調 op.109 (56年録音・発売)
64年放映
- 17 ソナタ第31 番変イ長調 op.110 (56年録音・発売)
58年ストックホルム・ライブ
63年放映
- 3 ソナタ第32 番ハ短調 op.111 (56年録音・発売)
55年放送

- リスト編曲：交響曲第5番ハ短調 op.67 (67/68年録音・68年発売)
- リスト編曲：交響曲第6番ヘ長調 op.68 (第1楽章のみ；68年録音・80年発売)
全曲，68年放送
- 10 「エロイカ」の主題による変奏曲とフーガ op.35 (60/67年録音・70年発売)
52年放送
60年放映
67年放送
- 1 創作主題による6つの変奏曲へ長調 op.34 (67年録音・70年発売)
52年放送
- 創作主題による32の変奏曲 WoO.80 (67年録音・70年発売)
67年放映
- 7つのバガテル op.33 (74年録音・75年発売)
- 1 6つのバガテル op.126 (74年録音・75年発売)
52年放送

- 1 チェロ・ソナタ第3番イ長調 op.69
ローズ；62年ストラトフォード・ライブ放映
- ヴァイオリン・ソナタ第7番ハ短調 op.30,no.2
シュムスキー；60年放映(未発売)
- ヴァイオリン・ソナタ第10番ト長調 op.96,no.10
メニューイン；65年放映
- 1 ピアノ三重奏第4番二長調 op.70,no.1「幽霊」
シュナイダー、ネルソヴァ；54年放送
シュムスキー，ローズ；62年ストラトフォード・ライブ
- 1 ピアノ三重奏のためのアレグレット変ロ長調 WoO39
シュナイダー、ネルソヴァ；54年放送

2. 関連する書籍

グールドの著作・発言

- (R1) Tim Page, ed. The Glenn Gould Reader. New York: Alfred A. Knopf, 1984.
ティム・ペイジ編。『グレン・グールド著作集』(全2巻)。野水瀧雄訳。みすず書房, 1990年。
第1巻に「グレン・グールド、ベートーヴェンについてグレン・グールドにきく」や、
ベートーヴェンのアルバムライナーノーツあり。
- (R2) Jonathan Cott. Conversations with Glenn Gould. Boston: Little, Brown and Company, 1984.
ジョナサン・コット。『グレン・グールドとの対話』。高島誠訳。晶文社, 1990年。
- (R3) Bruno Monsiegeon, ed. Non, je ne suis pas du tout un excentrique. Paris: Fayard, 1986.
ブリュノ・モンサンジョン編『ぼくはエクセントリックじゃない』。栗津順弘訳。音楽之友社, 2001年。
- (R4) John Roberts and Ghyslaine Guertin, ed. Glenn Gould: Selected Letters. Toronto: Oxford University Press, 1992.
ジョン・ロバーツ, ギレーヌ・ゲルタン編。『グレン・グールド書簡集』。宮澤享一訳。みすず書房, 1999年。
- (R5) Ghyslaine Guertin, ed. Glenn Gould: la serie schonberg. Paris: Christian Bourgois, 1998.
(グールドのシェーンベルクをめぐる放送番組の対話を再録したもの 邦訳刊行予定)
- (R6) John Roberts, ed. The Art of Glenn Gould. Toronto: Malcolm Lesters, 1999.
ジョン・ロバーツ編。『グレン・グールドの芸術』(新著作集・仮題)。宮澤享一訳。みすず書房(2002年刊行予定)。
- (R7) John McGreevy, ed. Glenn Gould: Variations. New York: Doubleday, 1983.
ジョン・マグリヴィー編。『グレン・グールド変奏曲』。木村博工訳。東京創元社, 1986年。

グールドの伝記・回想

- (R9) Otto Friedrich. Glenn Gould: A Life and Variations. New York: Random House, 1989.
オットー・フリードリック。『グレン・グールドの生涯』。宮澤享一訳。リブレポート, 1992年。
- (R10) Andrew Kazdin. Glenn Gould at Work: Creative Lying. New York: E. P. Dutton, 1990.
アンドルー・カズディン。『グレン・グールド アットワーク 創造の内幕』。石井晋訳。音楽之友社, 1993年。
- (R11) Peter F. Ostwald. Glenn Gould: The Ecstasy and Tragedy of Genius. New York: Norton, 1997.
ピーター・オストウォルド。『グレン・グールド伝 天才の悲劇とエクスタシー』。宮澤享一訳。筑摩書房, 2000年。

グールドの研究書

- (R12) Geoffrey Payzant, Glenn Gould Music and Mind. Toronto: Van Nostrand Reinhold, 1978. Revised edition.
Toronto: Key Porter Books, 1984. Sixth edition. Toronto: Key Porter Books, 1997.
ジェフリー・ペイズント。『グレン・グールド なぜコンサートを開かないのか』。初版より木村英二訳。音楽之友社, 1981年。
- (R13) Glenn Gould, pluriel. Textes reunis et presentes par Ghyslaine Guertin. Verdun, Quebec: Louise Courteau, 1988.
ギレーヌ・ゲルタン編。『グレン・グールド 複数の肖像』。浅井香織, 宮澤享一訳。立風書房, 1991年。
- (R14) Michel Schneider. Glenn Gould piano solo: Aria et trente variations. Paris: Gallimard, 1989.
ミシェル・シュネデール。『グレン・グールド 孤独のアリア』。千葉文夫訳。筑摩書房, 1991年。ちくま学芸文庫, 1995年。
- (R15) 宮澤享一監修。WAVE編。『グレン・グールド』。ベヨトル工房, 1989年。
- (R16) ブルーノ・モンサンジョン他。『グレン・グールド大研究』。春秋社, 1991年。
- (R17) Jens Hagenstedt. Wie spielt Glenn Gould?: Zu einer Theorie der Interpretation. Munchen: P. Kirchheim, 1991.
- (R18) Elizabeth Angilette. Philosopher at the Keyboard: Glenn Gould. Metuchen, N.J.: Scarecrow Press, 1992.
- (R19) Glenn Gould: Descriptive Catalog of the Glenn Gould Papers. Ottawa: National Library of Canada, 1992.
- (R20) Nancy Canning. A Glenn Gould Catalog. Westport, Connecticut: Greenwood Press, 1992.
- (R21) Michael Stegeman, Glenn Gould: Leben und Werk. Munchen: Piper, 1992.
- (R22) Kevin Bazzana. Glenn Gould: The Performer in the Work. Toronto: Oxford University Press, 1997.
ケヴィン・バザーナ。『グレン・グールド 演奏術』。サダコ・グエン訳。白水社, 2000年。

ベートーヴェン演奏を考える

月刊連続講座マガジン

今月号の記事

私のベートーヴェン	1面
次回講座の講師より	2面
講座報告	2面
知っとくコーナー	3面
講座と交歓コンサートの告知	4面
スタッフ一同より	4面

発行 :国立音楽大学音楽研究所 ベートーヴェン研究部門

〒190-8520 東京都立川市柏町 5-5-1

Tel. :042-535-9709

E-mail :ludwig@every-mail.com(変更になりました)

Web サイト :http://www.kunitachi.ac.jp/lvb/

当マガジンは、メールによる配信(メルマガ版)も行っております。購読を希望される方は、受講生以外でも受け付けます。上記 E-mail アドレスまでお申し込み下さい。

ベートーヴェンを初めて聴いたのは小学生の低学年の頃、父が持っていた LP で、確かベームの振った「運命」と、シュナイダーハンを弾いた「ヴァイオリン協奏曲」だったろうか。全部把握することなど到底できなかっただろうに、当時一冊が 100 円ちょっとだった全音の青い表紙のスコアをねだって買ってもらった。まだカデンツの存在など知る由もなかった私は、そのスコアを見ながら、どうして第 1 楽章の最後のあたりになると、シュナイダーハンは勝手に譜面がないことを弾くのだろうと心底疑問に思ったりした。

私のベートーヴェン - 転換の時代に - 客員所員 野平一郎

小学生の時は弱い子で、学校はしょっちゅう風邪で休みがちだった。そんな時枕元にあったのがベートーヴェンのピアノ・ソナタのミニチュアスコアで、確かこれもバックハウスの旧全集についてきたもの。熱があるから仰向けに静かにしてはならないのに、寂しいものだから、腹這いになってその楽譜を最初から読んでしまうのだ。あたかも誰かが演奏しているように。で、年令が年令なもので、第 1 番第 1 楽章からはじめたはよいが、必ず第 2 番の途中か第 3 番あたりで挫折するのが普通だった。よって私のベートーヴェン、特に初期のソナタについては、扁桃腺炎で寝ている記憶に結びついている。



それ以来さまざまなベートーヴェンのピアノ演奏を聴いてきた。ケンブ、ポリーニ、バレンボイム、グールド、グルダ、高橋悠治、ゼルキン、ギレリス、等々きりが無い。こんなすごい世界に自分も船出をして、そこで何か発言できるのかと考えるとまことに心ざびしいかぎりではある。しかし、こうした 20C の個性豊かな演奏家たちが示す人間の持っている力を最大限に発揮した演奏に続いて、おそらく 21 世紀のベートーヴェン演奏とはもっと柔軟で、より力の抜けた方法によっていくのではないのだろうか、この転換の時代にあって予感している今日この頃である。

文献紹介 アドルノの『ベートーヴェン』

解説：東口 豊（国立音楽大学講師・音楽学）

テオドール・W・アドルノ『ベートーヴェン 音楽の哲学』（大久保健治訳）1997年、作品社
Theodor W. Adorno, Beethoven: Philosophie der Musik. Hrsg. von Rolf
Tiedemann, Frankfurt am Main, Suhrkamp, 1993

本書の著者とされる Th.W. アドルノ(1903-69)は、哲学のみならず社会学、美学、音楽学など、幅広い領域において重要な仕事を残した 20 世紀ドイツを代表する思想家の一人です。音楽論に関しては、シェーンベルクとストラヴィンスキーを対照的に論じた『新音楽の哲学』や『マーラー 音楽観相学』、『音楽社会学序説』などが翻訳を通して紹介されており、既に彼の著作と思想に触れている読者も多いでしょう。

そんな彼の音楽論に、1993年新刊が出版されました。それが本書です。しかしこれは、アドルノの書いたものによる書物ではあっても、アドルノ自身が書いた書物ではありません。と言うのも、本書の編者ロルフ・ティーデマンによれば、アドルノは生涯にわたってベートーヴェンに関する著作を書く意図を持っていたにも拘わらず、結局はそれを果たせずに他界してしまい、膨大な量のメモ類のみが遺されたからです。本書は、そのようにして遺されたベートーヴェンに関するアドルノの断片やノート、編者のティーデマンがその内容に即して分類し、纏めたものなのです。

以上のような成り立ちの為、この本は決して統一した視点からベートーヴェンを論じたものではありません。しかし彼の哲学的なベートーヴェン解釈にはいくつかの特徴的な点が存在します。まず第1には、アドルノがベートーヴェンを「弁証法」的な観点から解釈しようとしていることです。主観と客観、内容と形式、部分と全体が常に対立的なものとして捉えられ、その点で「ベートーヴェンの音楽はヘーゲル哲学そのものである」（断片29）とまで言われます。そしてこれらの対立を、精神的な「労働」と捉え直された「主題労作」が媒介すると考えられています。第2の特徴は、ベートーヴェンの音楽に社会的な過程を見ようとする眼差しです。藝術の自律性はフランス革命やブルジョワジーの構造から説明され、ベートーヴェンにおける調性や様々な技術的な問題は、合理化された「自然支配」の問題と結びつけられています。

しかしこの様な議論は、決して抽象的なレベルにとどまるものではありません。この書物を豊かで、魅力的なものにしているのは、アドルノ自身による具体的な作品分析にあると言えるでしょう。例えば、ベートーヴェンの交響曲に興味のある人なら、交響曲第6番ヘ長調 op.68《田園》に関する断片243番を読んでみて下さい。そこでは、トーマス・マンのアドルノ評にあるように、哲学的な思考と音楽分析とが幸せなかたちで結びついています。一方、アドルノは《ミサ・ソレムニス》で再三暗礁に乗り上げ、彼自身の手でベートーヴェン論は書かれることはありませんでした。つまりこの書物は、偉大な藝術と類い希なる知性との、幸せにして不幸な出会いと格闘のドキュメントなのです。

では、私たちはそこから一体何を学び、感じるべきなのでしょう？アドルノは「ベートーヴェンが古びないということ、このことはおそらく、彼の音楽がいまだ現実によって追いつかれていないということ以外の何者でもない」（断片78）と言いますが、そのことはアドルノを介してベートーヴェンに触れることにも妥当するでしょう。ベートーヴェンの音楽が意味深いものとして私たちの前にある限り、アドルノの言葉は私たちの問いの指針として、進むべき道を指し示し続けるのです。

シンポジウムとコンサート

『ベートーヴェン最後の恋 “不滅の恋人” の意味を探る』

報告者：藤本 一子

日時：2001年10月16日（火）16:30 開演、場所：国立音楽大学講堂小ホール
基調講演：青木やよひ（特別ゲスト）、パネリスト：/礒山 雅/今井 顕/平野 昭
コンサート：山下浩司（バス・バリトン）/今井顕（ピアノ）

プログラム

- ・序：不滅の恋人 への手紙朗読：今井 顕
- ・第1部：基調講演「ベートーヴェンと女性」：青木やよひ
- ・第2部：討論「ベートーヴェンと 不滅の恋人 」：全パネリスト
- ・第3部：コンサート《遙かな恋人によせて An die ferne Geliebte》Op.98
山下浩司（バス・バリトン）、今井顕（ピアノ）

ベートーヴェンの死後発見された名宛人不明の恋文をめぐる謎。その解析を通して、ベートーヴェンの人生と創作を再考しようと試みるシンポジウムである。前年度の「ハイリゲンシュタットの遺書」に続く、ベートーヴェンによる文書ドキュメント・シリーズ第2弾ともいうべき企画である。現在、「不滅の恋人」問題のスペシャリストと目される青木やよひ氏をメインゲストに迎え、これに音楽学者と演奏家が加わってディスカッションをしようというもの。「大作曲家の女性問題」という、親しみやすいテーマが入り口になっていたためであろうか、参加者が多く、反響もまた大きかった。

まず問題の書簡が今井所員によって原語（ドイツ語）で朗読され（対訳は配布資料）、続いて青木氏による基調講演が行われた。「書簡」の謎解きに関する青木氏の研究、ついでベートーヴェンと女性についての氏の見解が語られた。女性の側からの考察が盛り込まれたことが、とりわけ、興味をひいた。

これをうけてディスカッションに入り、まずパネリストたちから、「書簡」をめぐる疑問（「書簡」は相手に発送されたのかといった基本的な問題など）やこれに対する意見が示された。このあと議論は「書簡」に代表される、この時期のベートーヴェンの人生上の出来事と、彼の創作との関わりへと展開していった。すなわち書簡が書かれた1812年前後のベートーヴェンの創作はどのようなものか、この時期に声楽作品が数多く生まれていることについていかなる解釈が可能か、といったものである。両者の関連については、基本的に積極的な見方が示された。しかし、一方で、特別の性格を有するこうした伝記資料をその時期の創作と関連づけることに対する否定的な見解も、提示された。創作は伝記上の出来事にとらわれず独自の様式的な歩みを行うのではないか、という見解である（平野）。

こういった伝記と創作をめぐる永遠の課題を含めて、さらにさまざまな問題がとりあげられたが、従

来わかりにくいとされていた中期ベートーヴェンの創作、そしてこれ以後の後期問題を考えるうえで、好適の機会となったことは間違いないだろう。

後半は「書簡」の出来事に関連する作品として、歌曲集《遥かな恋人によせて》(作品98)が演奏された。音楽家と音楽作品をめぐるこうしたシンポジウムの場合、これに関連して音楽作品を演奏する方式は、シンポジウムの実を高めるうえで、きわめて効果が高い。今後も、研究と演奏がよい形で連携した企画を実現できればと考える。

以下、シンポジウム関連資料および「講座マガジン」から関連資料を掲載しておく。

シンポジウムとコンサート

ベートーヴェン最後の恋

“不滅の恋人”の意味を探る

司会
磯山 雅

パネリスト
今井 顕
平野 昭

ゲスト
青木やよひ

演奏：山下浩司(バリトン) 今井 顕(ピアノ)

曲目：《遥かな恋人に寄せて》Op.98

入場無料

皆様のお越しをお待ちしております

国立音楽大学小ホール

多摩都市モノレール / 西武拝島線 「玉川上水駅」徒歩約8分

10/16 (火)

16:30 開演

お問い合わせ：国立音楽大学音楽研究所 ベートーヴェン研究部門

Tel.: 042-535-9709 (直) E-mail: beethoven@zdnmail.ne.jp Web サイト <http://www.kunitachi.ac.jp/lvb/>

ベートーヴェンと特に親しかった女性たち



ヨゼフィーネ・フォン・ダイム伯爵夫人
(Josephine von Dyme 1779-1821)

テレゼ・ブルンスヴィク
(Therese Brunsvik 1775-1861)



アンナ・マリー・エアデーディ伯爵夫人
(Anna Marie Erdody 1779-1837)



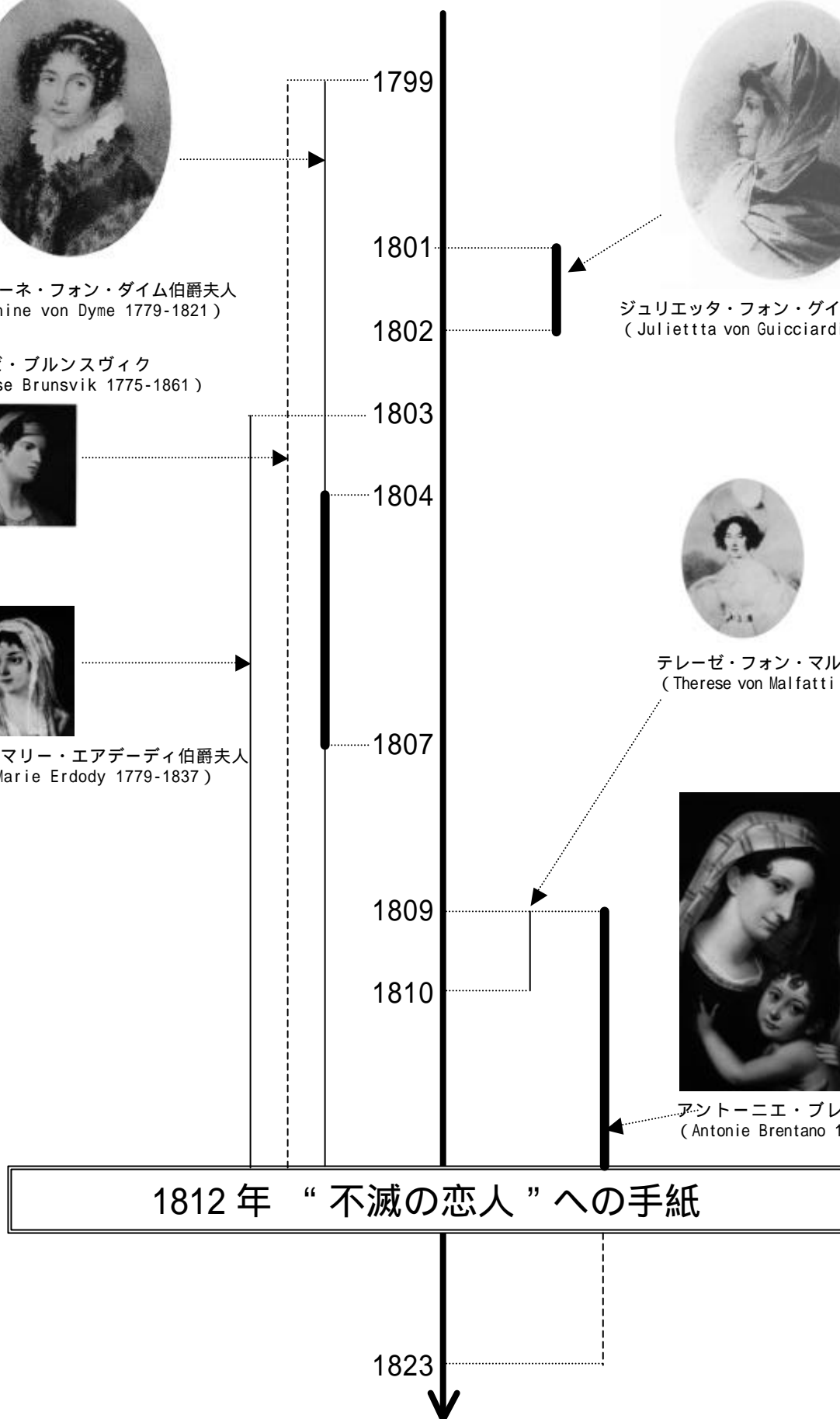
ジュリエッタ・フォン・グイッチャルディ
(Julietta von Guicciardi 1784-1856)



テレゼ・フォン・マルファッティ
(Therese von Malfatti 1792-1851)



アントーニエ・ブレンターノ
(Antonie Brentano 1780-1869)



不滅の恋人 への手紙 謎の解明

1. 不滅の恋人 への手紙とは

ベートーヴェンの死後翌日 1827 年 3 月 27 日に友人プロイニングが発見。
四つ折にされた手書き文。封筒なし。

年 = 記載なし。日付と曜日 = 7 月 6 日月曜日。

書かれた場所はウィーンから離れた地。あて先は定期的に馬車が出ている「K」。
(現在ベルリン国立図書館所蔵)

2. 書かれた年、宿泊地、名宛て人の解明

- ・ シンドラー 『ベートーヴェン伝記』(1840 年); 1806 年にグイッシャルディ宛て。
- ・ シンドラー 『ベートーヴェン伝記』第 3 版(1860 年); 1801-3 年 名宛て人は同上。
- ・ セイヤー 『ベートーヴェン伝記』(1879 年) 第 3 巻; 1806 年テレゼ・ブルンスヴィク。
- ・ ロマン・ロラン 『ベートーヴェン伝記』(1903 年) 同上 のちに 1806 年を撤回。
- ・ トマス・サン・ガリによる年と宿泊地の科学的探求(1910 年まで)。
ベートーヴェン関係の状況証拠、「湯治客名簿」と「警察記録」を調査。
- ・ マックス・ウンガーが新聞「著名人消息欄」「気象記録」から補強。
「1812 年、宿泊地テプリツェ」と特定。ただし恋人は特定できず。

3. 恋人は誰か - イニシャルは「A」

候補：アマーリエ・ゼーバルト、ベッティーナ・プレントナー、テレゼ・マルファッティ、ジュリエッタ、テレゼ・ブルンスヴィク、フォン・レック男爵夫人、リヒテンシュタイン侯爵夫人、ドロテア・エルトマン男爵夫人、アントーニエ・プレントナー夫人(が当時テプリツェに滞在していた女性)。ベートーヴェンの当時の日記にイニシャル「A」の女性。

「アントーニエ・プレントナー」

手紙は、1812 年 7 月 6 日と 7 日に、テプリツェの宿で、カールスバートにいる恋人に宛てて急いで書かれた。相手の女性はアントーニエ・プレントナーと推測。(ヨゼフィーネ説もまったく排除されたわけではない)

1812 年夏のベートーヴェンの旅程

ベートーヴェンは 1812 年シュタウデンハイム博士の助言で前年に続きテプリツに出かける。

6/29 朝 4 時; ウィーン出発。プラハへ

7/4: プラハ出発。ラウン-ビリン経由。

7/5: テプリツェ着。「金色の太陽」館に宿泊

7/7 以降: テプリツェ「櫻の木」館 62 号室に移動。

7/19: ゲーテと会う

7/27: カールスバート着。「神の眼」館(プレントナー一行と同じ宿)に宿泊

8/6: カールスバートで慈善音楽会を開催

8/8-9/7: フランツェンスブルク着。「2 頭の金獅子」館(プレントナー一行と同じ宿)に宿泊。

9/8: カールスバートでゲーテと会う

9/10-29: テプリツェに滞在

10/5 - : リンツの弟を訪問

11/8: ウィーン帰着



ベートーヴェンが親しい女性に献呈した、または献呈を予定していた作品

1. 特に親しかった女性に献呈した作品

- * エレオノーレ・ブロイニング Eleonore Breuning
 - ・ピアノとヴァイオリンのためのロンド Wo041
 - ・フィガロの結婚の主題による 12 の変奏曲 Wo040 (ピアノとヴァイオリン)
 - ・ディッターズドルフの《赤頭巾》からのアリエッタによる 13 の変奏曲 Wo066
 - ・ピアノソナタ八長調断章 Wo051
- * ジュリエッタ・グイッチャルディ Julietta Guiccardi
 - ・ピアノソナタ第 14 番 Op.27 の 2 (《月光》)
- * ヨゼフィーネ・ダイム伯爵夫人 Josephine Dyme (結婚前ヨゼフィーネ・ブルンスヴィク伯爵令嬢)
 - ・歌曲《希望によせて An die Hoffnung》第 1 作 Op.32 [印刷楽譜には献呈の記載なし]
- * テレーゼ・ブルンスヴィク伯爵令嬢 Therese Brunsvik
 - ・ピアノソナタ第 24 番 Op.78 (《テレーゼ》)
- * ヨゼフィーネ・ダイム伯爵夫人とテレーゼ・ブルンスヴィク伯爵令嬢
 - ・歌曲《君を想う》の主題による 6 つの変奏曲 (ピアノ連弾) Wo074
- * マリー・エルデーディ伯爵夫人 Marie Erdody
 - ・チェロソナタ第 4 番、第 5 番 Op.102 の 1、2 (1819 年ウィーン出版譜)
 - ・ピアノ三重奏曲 Op.70 の 1 (《幽霊》)、2
- * テレーゼ・マルファッティ Therese Marfatti
 - ・バガテル《エリーゼのために》 Wo0.59
- * アントローニエ・ブレンターノ Antonie Brentano
 - ・ディアベリのワルツによる 33 の変奏曲 (《ディアベリ変奏曲》) Op.120
 - ・ピアノソナタ第 31 番 Op.110
 - ・ピアノソナタ第 32 番 Op.111
 - (ピアノソナタについては献呈を予定していたが、出版譜では、31 番は献呈なし、32 番はルドルフ大公に献呈)
- * マクシミリアーネ・ブレンターノ Maxmiliane Brentano [アントローニエの長女]
 - ・ピアノ三重奏曲アレグレット Wo039
 - ・ピアノソナタ第 30 番 Op.109

2. 弟子ですぐれたピアニストに献呈した作品

- * バルバラ・オデスカルキ伯爵夫人 Barbara Odescalchi
 - ・ピアノソナタ第 4 番 Op.7
 - ・ピアノ協奏曲第 1 番 Op.15
 - ・ベートーヴェンの自作主題による 6 つの変奏曲 Op.34
- * ドロテーア・エルトマン男爵夫人 Dorothea Ertmann
 - ・ピアノソナタ第 28 番 Op.101

夏のベートーヴェン

郊外の保養

所員 藤本一子

夏は避暑地で自然の風をうけてすごしたいもの。ベートーヴェンも人生の大半の夏を郊外で過ごしました。

17歳から22歳の秋まで、ベートーヴェンはケルン・ボン大司教=選帝侯宮廷のヴィオラ奏者でした。君主マクシミリアーン・フランツはオーストリア皇帝の末弟でしたから夏はとくに客人が多く、楽士たちも郊外ポッペルスの離宮で奏楽に明け暮れたようです。ライン川の船遊びに随伴したことも知られています。

ウィーン時代は、当地の貴族や市民にならって、郊外の保養地に宿をとります。ウィーンは城壁と堡塁に囲まれていたために蒸し暑く、多くの人が7月を待たずに城壁の外に出かけました。ベートーヴェンがはじめて郊外に長期滞在するのは1799年、保養地メートリングです。経済的な余裕ができたと見ることもできますが、難聴の苦悩を告白した最初の年でもあります。

初期の主な滞在地は、馬車で1時間程のデープリングとハイリゲンシュタット。後者は“ハイレン[癒す]シュタット[場]”の名が示すように効能が知られた温泉保養地でした。『遺書』が書かれたことでも有名です。保養地滞在中のベートーヴェンは散歩を好み、携行したスケッチ帳に楽想を書きとめます。快適な時間によって創作が促されたのでしょうか、第2 - 第6交響曲はこれらの保養地で集中的にすすめられました(第4はトロップパウ)。

【ベートーヴェン夏の主な滞在地】

ボン時代

1787-92ボン・ケルン選帝侯の夏の離宮

ウィーン時代

1793 ハイドン滞在中アイゼンシュタット訪問

1799 郊外メートリング

1800 郊外ウンターデープリング

1801 郊外ヘッツェンドルフ

1802 郊外ハイリゲンシュタット(『遺書』)

1803 郊外イェトレ湖

郊外バーデン、オーバーデープリング

1804 郊外オーバーデープリング

1805 郊外ヘッツェンドルフ

1806 ハンガリー[トロップパウ近郊]

1807 郊外バーデン、ハイリゲンシュタット

1808 郊外ハイリゲンシュタット、バーデン

1809 郊外バーデン

1810 郊外バーデン

1811 ボヘミア[テプリツ]

1812 ボヘミア[テプリツ、カールスパート、フランツェンスブルン]

1813 郊外バーデン

1814 郊外バーデン

1815 郊外イェトレ湖、バーデン、ウンターデープリング

1816 郊外バーデン

1817 郊外ヌスドルフ

1818 郊外メートリング

1819 郊外メートリング

1820 郊外メートリング Op.109

1821 郊外ウンターデープリング、バーデン

1822 郊外オーバーデープリング、バーデン

1823 郊外ヘッツェンドルフ、バーデン

1824 郊外バーデン

1825 郊外バーデン

1826 保養にでかけず

1827 3月26日死去



カールスパート 温泉の水飲み場 1815年

1807年頃から、保養滞在はバーデンとメートリングに移行します。いずれも市内から馬車で3時間程のところ。瀟洒なカジノやホールが併設され、王侯貴族も集う夏の社交地でした。ただしベートーヴェンが好んだのは溪谷を散歩すること。喧騒を逃れたこれらの地で、『第9』『ミサ・ソレムニス』『ディアベリ変奏曲』といった大作が、時間をかけて書かれます。ピアノソナタOp.109もメートリングで作曲されました。滞在期間はたいてい2ヶ月程度でしたが、後年になると長期化する傾向がみられます。

こうしたなかで注目されるのが1811年と1812年です。医師の勧めとはいえ、ベートーヴェンは突然のように遙かな地ボヘミアに旅したのです。2年目にあたる1812年は折しもナポレオンのロシア侵攻前夜。列強諸国の主導者がボヘミアに集結し、テプリツやカールスパートは常ならぬ賑いをみせたといわれます。この不穏な空気の中で「不滅の恋人」への手紙が書かれ、ゲーテとの邂逅がはたされ、第8交響曲が作曲されました。しかしボヘミアの夏はなぜか2年で終わりをつげ、翌年から再びウィーン近郊に戻ります。

振り返れば、ベートーヴェンは夏近くなると早々に、医師と相談して湯治場の宿を予約しています。“耳”と“腸”の疾患を抱えながらも自然の中での創作は喜びであったのでしょうか。35年におよぶ夏の保養地滞在は、その人生と音楽を知る上でキーポイントのひとつかもしれません。



テプリツ城内庭園 1815年頃